巣鴨まちかど遺跡ミュージアム

中山道待夢を発掘する

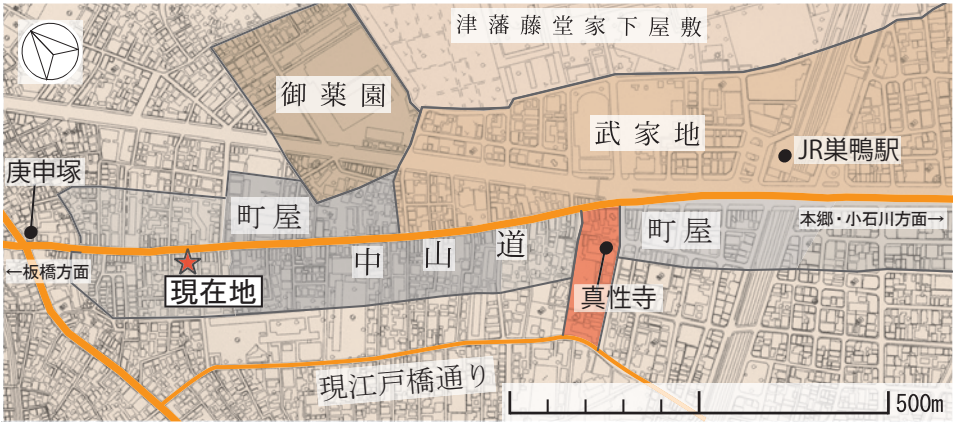
はじめに

巣鴨地域一帯には、地域の名前を冠した「巣鴨遺跡」があります。1991年以降、現在までに100を超える地点で本格的な発掘調査が行なわれてきました。この数は豊島区内の遺跡では最も多いものとなっています。調査件数が増えるにつれて、旧石器時代から江戸時代、さらにはアジア・太平洋戦争以前までの多様な時代の遺構（いこう）や遺物（いぶつ）が巣鴨の地下に残されていることがわかってきました。

江戸時代の後期、巣鴨町は江戸六地蔵の一つがある真性寺（しんしょうじ）を中核として、中山道（現在の地蔵通り～国道17号）に沿ってひろがっていました。この町は、18世紀初頭に巣鴨村の中を通る街道沿いに形成され、延享２（1745）年には町奉行支配地となったと文献に記されています。

これまでに巣鴨地区で行なわれた発掘調査では、江戸時代の人々が残した生活の痕跡が発見されています。それらを細かく検討してみると、18世紀の中頃以後、遺物（いぶつ）や遺構（いこう）が急に増加する事が判ってきました。つまり町奉行支配地となったのに前後して、この地域の人々の生活が大きく変化していったことが推定できるわけです。

この度の展示では、巣鴨遺跡に初めて鍬が入られ、江戸時代後期の町家跡が発見された、中山道待夢（なかせんどうたいむ）（巣鴨地域文化創造館）地点の調査成果をご紹介します。



嘉永５(1852) 年の巣鴨周辺と現在の地図

（江戸切絵図を基に作成、実際の範囲とは異なる可能性があります）

江戸時代には巣鴨町上組の範囲に含まれていたこの地区の調査では、中山道沿いの部分が大きく破壊されていたため、残念ながらこの辺りの様子はあまりわかりませんでした。

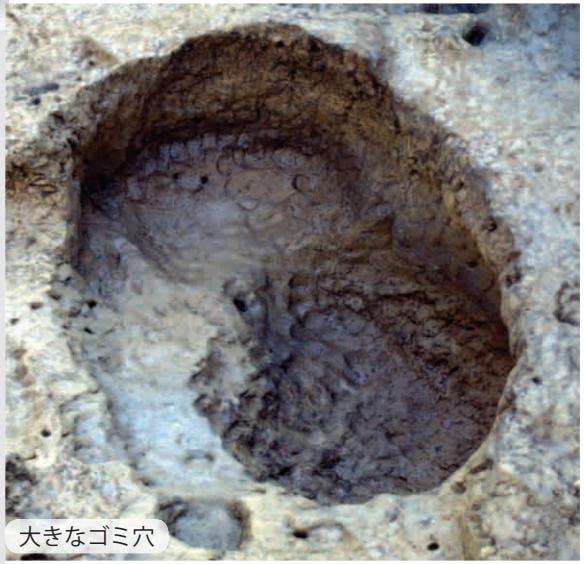
調査区南側
（北東から撮影）

調査区南側の
発掘調査風景

植栽痕

しかし、通りから奥まった南側では比較的多くの情報を得ることができました。この地区の調査で目立っているのは、私たちが植栽痕と呼んでいる庭木を移植する時に残される円形の掘り込みです。33 基が発見されました。

ゴミ穴も数多く、深さ３ｍを超えるような大きなものを含めて、14 基程が発見されています。



大きなゴミ穴

階段の付いた地下室

地下室から出土した遺物

この他に井戸２基、地下室２基などがありました。これらの遺構は複雑に重なりあっており、ここが長年に渡り繰り返し使われていたことを示しています。

植栽痕やゴミ穴は基本的に、庭として利用された空間に残されているものです。このような遺構の配置からは、調査地区の南半分が主に庭として使われていた状況が考えられます。そして、恐らく、すでに壊されていた北側に中山道に向いて軒を連ねていた建物（町家）があったのでしょう。

ゴミ穴などからは、江戸後期を中心に数多くの遺物が出土しました。遺物を見てみると、有田や京都、信楽、瀬戸、堺などで生産された焼き物が多いです。白い器（磁器）では飯茶碗・湯呑み・皿・鉢などの飲食器が出土しています。

有田や瀬戸で生産された磁器の器（左：碗類、右：皿・鉢・碗蓋）

調理具や灯火具、植木鉢など様々な日用品が出土

また、擂鉢や焙烙といった調理具も見られます。このほか、植木鉢、灯火具、煙管、硯、土製玩具、簪、さらに地中では腐りやすい下駄も見つかっています。

出土した下駄

こうした豊富な資料から、どのような生業（商い）が考えられるでしょうか。江戸後期の史料には、この辺りが「荒物屋 嘉七（近江屋）」と記されています。様々な日用品を取り揃えていたミセならば、出土した遺物の種類の豊富さも納得がいきます。近隣の住人は、何か必要なものがあれば、「近江屋を覗いてみるか」となったことでしょう。あるいは、荒物屋だけではなく、周辺の店や住人のゴミを含んでいるとも考えられ、共有スペースとしての庭空間であったのかもしれません。

巣鴨まちかど遺跡ミュージアム
中山道待夢を発掘する
2013年1月4日発行

編集：NPO法人としま遺跡調査会
ＨＰ：http://www.toshima.iseki.org/
発行：公益財団法人としま未来文化財団
巣鴨地域文化創造館
資料提供：豊島区教育委員会